

## 善の弱さ、アクの強さ

原 英一 Hara Eiichi

ディケンズ関係のシンポジウムを傍聴した別分野のある研究者が、こんな感想を述べたことがある。「ディケンズをやる人たちは、小説中のキャラクターを、ピックウィックさんとかミコーバさんなどと呼んで、まるで友だちみたいだね。」

現代批評の常識から言えば、小説中のキャラクターは、テキストによって創造され縛られた存在だから、その小説以外の場所で生きるということはありえない、ましてや「友だち」であるはずはない。作品から離れて登場人物を論じれば、それだけで素人扱いされそうである。しかし、ディケンズの場合、ときとして登場人物が作品を離れて自由に生きているような錯覚にとらわれることもないではない。何しろ、彼のキャラクターの何人かは、普通の英和辞典にも載っているのだから。試みに「ピックウィック」を『研究社英和中辞典』で引いてみると、Pickwickian という見出しがあって、「善意でユーモアのある」と説明されている。『リーダーズ英和辞典』になると、「ミコーバさん」も載っていて、派生語として「Micawberism 空想的楽天主義、たなぼた主義」というものもある。探せば他にもいくつもあるだろう。ディケンズのキャラクターは英和辞典の「登場人物」としては、もちろんシェイクスピアにはかなわない。それでも、彼らには「小説」から「辞書」に居場所を変えるだけの生命力ともいべきものがあることは確かなようだ。

その「生命力」の源泉は、彼らの強烈な個性である。やはり『リーダーズ英和辞典』の見出しになっているディケンズ『骨董店』(*The Old Curiosity Shop*,1840-41)の登場人物キルプなどは典型例だ。この醜悪なドワーフは、熱湯をがぶがぶと飲み、生卵を殻ごとがつつ食い散らし、はては犬とワンワン吠え合うなど、およそ人間とは思えない異常なエネルギーに満ちている。こいつの正体、というかモデルは、人形劇「パンチとジュディ」のパンチである。パンチはありとあらゆる悪行をやりたい放題の悪党で、悪行の報いで地獄に墮ちても、魔王ルシファーをまんまと出し抜いてしまうというとんでもないやつだ。『オリヴァー

・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1839)に登場するフェイギンもまた、「邪悪なユダヤ人」(これは偏見に満ちた文学上のステレオタイプ、念のため)として、シャイロックと並ぶほどに悪名高い。彼も『リーダーズ英和辞典』では、「子供たちに盗みを仕込む親分、老悪党、老いかさま師」という語義で、小文字の普通名詞にもなっている。ディケンズ以外でも、小説の登場人物では、ジキル博士と Hyde 氏、フランケンシュタイン[怪物]、デュ・モリア『トリルビー』(*Trilby*, 1894)の登場人物スヴェンガリなども普通名詞的語義という榮譽を与えられている。

ここで気づくことは、こうした強烈な個性を持つ者たちのほとんどが悪人だということだ。人間性を十分に表現しようとする文学であれば、人間の本性たる善悪両面を描かなければならない。悪を描くためには、善を描かなければならないはずだ。しかしながら、たいていの場合、どちらかといえば、悪を描くよりは、善を描く方が困難だ。悪のキャラクターはそれだけで存在感を持つものだが、善のキャラクター、とくに善そのものとも言えるようなキャラクターは、何となく嘘くさい存在になることが多い。ひねくれた読者は、すぐに「偽善」を嗅ぎ取ろうとするためだろうか。それだけに、善のキャラクターとして、ピックウィックは注目に値する。「悪の作家」と言っても過言ではないロシアのドストエフスキーが、『白痴』(*The Idiot*,1868)で「完全に無垢の人間」ムイシュキンを創造しようとしたとき、三人のモデルが想定されていた。第一はキリストであり、第二にはドン・キホーテ、そして三人目がピックウィックである。「ドン・キホーテよりはるかに弱い概念ではありますが、それでもなお巨大なものです」(姪のソーニャ・イワーノヴナ宛書簡)。

それほど重要なキャラクターであるはずだが、なぜか論じられることが少ない。これは批評家たちの眼が曇っていることの証拠と言えるだろう。ドストエフスキーは、小説家でありながら、オーストリアの小説家フランツ・カフカと並んで、最も畑眼なディケンズ批評家といってもよい。

それでもやはり例外でしかない。善なるキャラクターは、ピックウィックのような「大物」ですら、善なるがゆえに、軽視されてしまうのである。リチャードソンのパミラとクラリッサの場合も同様だ。彼女たちは長大なテキストの中で十分な存在感を与えられていくのだが、それは善であるがためというよりは、「迫害される犠牲者」として、読者の同情を喚起するためと考えるべきだろう。『パミラ ― 美德の報酬』(*Pamela, or Virtue Rewarded*, 1740)のヒロインよりは、その陰画であるマルキ・ド・サドの『ジュリエット ― 悪徳の栄え』(*Juliette, or the Prosperity of Vice*,1797)のヒロインの方が、キャラクターとしては、強い印象を与えるのである。

小説には、善玉悪玉とりまぜて、強烈なキャラクターはいろいろ出てくるけれども、主人公に限って見てみると、意外に印象の弱い場合が多々あるように思われる。再びディケンズの例で恐縮だが、オリヴァー・トゥイストやデイヴィッド・コパフィールドは、存在感がきわめて薄い。オリヴァーなど、何の主体性も個性もなく、ただプロット展開の道具としての存在意義しかないように思われる。デイヴィッドは、幼少のときこそ子供としての存在感があるが、大人になってからは明らかに傍観者になってしまう。それはやはり彼らが善なる主人公として描かれるからではないだろうか。ゴールドスミス『ウェイクフィールドの牧師』(*The Vicar of Wakefield*, 1766)のプリムローズ師は善そのものの人間ではあるが、不運に振り回されるばかりだ。フィールディング『ジョウゼフ・アンドルーズ』(*Joseph Andrews*, 1742)の主人公も疑いもなく善であるが、脇役の「超」善人アダムズ師に主役の座をほぼ完全に奪われている。こうした影の薄い主人公たちの中では、イヴリン・ウォーの『大転落』(*Decline and Fall*, 1928)に登場するポール・ベニフェザーが白眉だーというのもおかしな言い方だが、あまりにも弱いキャラクターなので、かえって目立つ。彼も一応善人らしいのだが、名前(Pennyfeather)の通り、吹けば飛ぶような存在で、何の個性もなく徹底的に受動的な主人公なのである。金持ちの不良学生たちが起こした騒動に巻き込まれ、何も落ち度がないのにオックスフォードを退学になった貧しい給費生の彼は、北ウエールズにある私立学校の教師となる。ここでも一癖も二癖もある教師や生徒、さらに父兄たちの中で、あちらこちらへ振り回されるのだ。ウォーは、個

性に乏しい善なる主人公という小説のコンベンションを逆手に取っている ― というよりは、究極にまで追い込んだのだろう。

一方、完全な脇役でありながら、燃え上がるような個性を示すキャラクターもいる。多数の脇役の一人一人を生き生きと描き出すという点で、ウォルター・スコットは、『戦争と平和』(*War and Peace*, 1865-69)で五百人を超える登場人物を描き分けたロシアのトルストイに負けてはいない。一人だけ例をあげておこう。『古老』(*Old Mortality*, 1816)に登場する狂信的な老婆モーズは、私の知る限りイギリス小説中最も強烈なキャラクターの一人だ。スコットランドの盟約者軍(Covenanters)の叛乱に加わった彼女が、1679年ドラマクログの戦場で敵軍の将クレイヴァハウスを椰楡する場面はこうだ。

ヒースの上に立ち、被り物を脱いだ彼女の銀髪が風に翻る様は、さながら老いたバッカスの巫女あるいはテッサリアの魔女が狂乱して呪文を唱えているかのようだ。彼女は、敗走する敵軍の先頭にクレイヴァハウスの姿を見つけると、皮肉たっぷりここう叫んだ。「待ちやれ、待ちやれ、おめえら、聖者様たちの集まりさ行きたくてたまんねえもんじゃから、スコットランド中のムア(荒野)というムアを探し回って、会堂(長老会派の秘密集会所)をやっとこさめつけたってえのに、しっぽを巻いて逃げようってのかえっ? . . . 性懲りもねえおめえらめが、血をいっぺえ流しやがったくせして、助かるうって魂胆かえっ! . . . つるぎは抜き放たれたのじゃ、いくら逃げ足が速かるうが、すぐにおめえらに追いつくべっ!」(第17章)

クレイヴァハウスこと初代ダンディー子爵ジョン・グラハム(1649-89)は、いかなる美女も顔負けの美貌で「美しきダンディー」(Bonnie Dundee)とバラードに歌われ、かつ外見とは裏腹の勇猛剛胆で知られた歴史上実在の軍人である。モーズは虚構の、一介の農婦に過ぎない。しかし、ここでは彼女の存在感は圧倒的だ。我こそ歴史の主人公なり、という気概が溢れんばかりである。白髪をふり乱して荒野の上に立ちつくし、スコットランド方言で激しい呪詛を浴びせるこの狂信的老婆は、読者の脳裏に消しがたい刻印を残すスコットの幾多のキャラクターたちの代表格なのである。

(東北大学教授)